

水の無意識 風の記憶 ～水と風がひとをつなぐ～

趣旨説明

長浜市と京都大学人間・環境学研究科との提携事業〈風雅のまちづくり〉の中で、「風雅」の一つの特徴として、暮らしのなかに自然の運動を導入することが指摘されている。この特徴は、日本の昔ながらの暮らしぶりの中に意識的に取り上げられていた。

先般の〈カワド〉の調査研究によっても、長浜のまちづくりにおいては、各戸の背後空間、したがって人々の暮らしの奥まった部分に、共通した水路を通すという設計が見られることが分かった。「水」は生命の源であると同時に、それ自体には形がなく、時には人間に危険をもたらす自然的な要素である。そうした要素を、あえて町の生活の内臓部分に導き入れるということは、利便性の増進のみならず、別の集団的な意向が働いていることを考えさせる。

水の来し方に思いをめぐらすと、「水」は、英雄誕生の神話や三途の川の想像にあるように、死者の世界から生命的なものを引き出してくる通路として捉えられている。そして「風」を導き入れるということにも、同様の含意がある。風は、たとえば「生死の風に吹かれる」ことが死ぬことを意味するように、季節の移ろい、あるいは無常のしるしそのものである。

こうした意味での「風」を生活の中に導き入れてきた実践として、日本人にとって、尺八の音色を聴くということはとくに意味のあることであった。虚無僧が各家の戸口に立って尺八を吹いたということは、仏陀が、死別の哀しみに暮れる女性に対して、死んだ人のいない家を見つけてくるように言ったという故事を思い出させる。尺八の音色によって我々は死者とのつながりを、家の中に、そして自分の体の中に喚起される。

尺八の音色は、我々の心の中に吹き込んでくる風の音である。風雅とは、自然を導き入れながら、生死の風に開かれるということの意味しているに違いない。

ここで風からふたたび水のほうを振り返れば、水は体液として我々の脈管の中を流れてほぼ我々の体の形に沿って運動する。人間の体は、他の水から切り離された、一つの閉鎖的な水系である。そして他の水から切り離されていない水系が植物であり花である。

我々の肺は空気を吸い込んで、それを水に伝えている。その空気の中に音が含まれているときを想像してみるなら、音は水に伝えられ、それ自体の自然の運動を水に伝えようとするだろう。すると水は我々の体を、その運動に沿って形作ろうとするだろう。我々の体は、風が水面に立てた波のような形に作られるだろう。水系に住む人の生命活動は、巨大な琵琶湖という楽器の上を風が通るときに奏でられる音楽にも喩えられる。

今回のプロジェクトでは、自然における死者からの使者としての水と風、その伝言を受けた人間の心を、音楽と映像で体験することを試みる。

人間の体の一つの水系として思い描くため、長浜市の淀川水系源流から大阪湾までを一つの体と思念して、各地からの水の姿を尺八の音とともに体現する映像作品『水の景』。古来からの風雅の伝統を、鮮やかに空間を吹き抜ける音で伝える尺八奏楽。そして水に当たった音が水を吹き上げ、水に華麗な姿態をとらせるメディア芸術による『音の生け花』。

我々の体と暮らしを自然へと開くために、これら3つの芸術作品を展示・公演します。

水の無意識 風の記憶
～水と風がひとをつなぐ～

プログラム

2013年9月2日～8日

9：30～17：30

四居家土間ギャラリーにて
映像作品『水の景』を展示

構成・映像：大橋 勝

音響：志村 哲

2013年9月8日

曳山博物館伝承スタジオにて
講演と音楽と作品呈示

第一部：講演

13：30～14：30

新宮一成

大橋 勝

第二部：トークと演奏と作品発表

14：45～16：45

志村 哲 講演と尺八演奏

土佐尚子 講演と作品発表

第三部＜質疑応答・討論＞

17：00～18：00

講演者、演奏家、作家、フロア